かたりべ 15

豊島区立郷土資料館だより

雑司が谷並木ハウスでの手塚治虫

寺田ヒロオ「トキワ荘物語」より

さようなら手塚治虫 夢をありがとう

旧椎名町五丁目の木造アパート〝トキワ荘〟には、一九五四（昭27）年～六一（昭36）年にかけて、新人漫画家十数人が住み、マンガアパート、漫画家の梁山伯といわれました。

この〝トキワ荘〟に住んだ漫画家第一号が、手塚治虫です。手塚を親って集ってきた新人漫画家たちは、親鳥、手塚にはぐくまれて、次々と子どもたちの夢にせまっていきました。

「ジャングル大帝」は、トキワ荘時代に描かれた作品です。

一九二八（昭3）11・3　豊中市に生まれる。
一九四五（昭20）1　少国民新聞（現毎日小学生新聞）に「マアちゃんの日記帳」連載でデビュー。
一九四七（昭22）　大阪大学医学部入学。
一九五〇（昭25）10　「ジャングル大帝」連載開始。
一九五二（昭27）4　「鉄腕アトム」連載始。
一九五三（昭28）　トキワ荘竣工と同時に14号室に入居。
一九五五（昭30）10　トキワ荘14号室を藤子不二夫に譲り、雑司が谷のアパート〝並木ハウス〟10号室に入居。
一九五九（昭34）10　結婚して、並木ハウスを転出。

（豊島区時代のゆかりの品々を大ケースにて展示中）

空襲をのがれて

爆音、悲鳴、怒号、人と人とがぶつかり合う火の海の中を母を背負った父は必死の思いで「中学！巣鴨中学の方へ行け！」と言う叫び声につられて、巣鴨中学まで逃げ、中学校のすぐそばの渋沢さんという大きな屋敷の庭に逃げ込んだが、庭の木々までが燃えており広い庭の中を逃げまどったが、やっと隅の方に安全と思われる場所を見つけて高い石垣の蔭に母をおろし、顔だけを出して全身を土にかぶせて、ふりかかる火の粉を父は夜っぴて払いのけていったそうだ。

これは『学童集団疎開　私と子供達』と題した亀田喜代さん（旧姓　金丸さん）の手記の一部です。亀田さんは母校・時習国民学校の集団疎開の寮母として一九四四（昭和一九）年から四五年にかけて長野県戸倉町および坂城町にいました。その間、東京に残った御両親が四五年四月一三日の東京西北部の大空襲に遭遇したのです。娘の出発を「今こんな大事な時だものお国の大切なお仕事だから……出征の気持で行きなさい」と見送った母親はリウマチを病んでいました。悪夢のような一夜を渋沢邸で過ごした後、父親は母の実家の川越に行くべくリヤカーを探しに行く。しかし、その間に母親は死んでしまうかもしれない。「父は意を決し、母に『死ぬなよ　頑張って待っていてくれ』と言い残し、未だくすぶり続けている中を歩きに歩いて焼けなかった区外の知人宅からリヤカーを借りて来」、母親をリヤカーに乗せて、父親は歩きどおしで川越まで運んだという。亀田さんは「その時の父の気持、そしてどんなに心細かったであろう母の気持を考えると一緒にいてあげられなかった自分が責められてつらかった」と回想されています。

母親はその後、川越で亡くなります。亀田さんは「ハハヤマイオモシ」の電報で川越に向かいますが、同じく寮母として坂城のお寺にいた妹さんは、その直前に一度帰っているからとの理由で許可がおりませんでした。空襲を受けたところだけでなく、疎開先もまた、文字通り親の死目にもあえない戦場となっていたのです。

空襲と学童疎開、密接に関連したこの二つは現代の戦争が銃後の民衆に何をもたらすかを考える絶好の素材です。当館常設展の収蔵展示室では空襲と学童疎開をテーマにおいたコーナーを設けました。爆死した人の血のついた財布と紙幣、溶けた花器と薬ビン、焼けた米と本など、区内での被災品も展示しています。疎開学童と東京の家族との往復書簡などと合わせて、戦争について考え、話し合う機会にしていただければと思います。

〔亀田さんの手記は今年度刊行計画中の『学童疎開資料集・1』（仮題）に全文収録の予定〕

金丸お姉さんと子どもたち

江戸の光と影

「江戸時代の豊島区のようすを教えて下さい」区内の子どもたちからのこんな質問が、郷土資料館には数多く寄せられます。しかし、残念ながら豊島区は、戦災で区域の約七割を焼失しており、近世の豊島区を解き明かす古文書はほとんど残されていません。それでも、近世の豊島に生きた人々の姿をリアルに読み取ることができます。

歌川広重や葛飾北斎など近世後期に活躍した著名な浮世絵師たちは、桜やつつじが咲きつどう風光明媚なこの地域を、江戸名所の一つとして浮世絵の題材に好んで選びました。このような浮世絵は、当時の人々にとって「観光案内」の役割も果たしており、区内の雑司が谷や染井は、江戸市民の「観光スポット」として、かなりのにぎわいを見せました。

このように近世後期の豊島区域は、いわば、光あふれる江戸市民の「憩いの場」・「遊びの場」であったのですが、今回展示する雑司が谷・柳下家に伝わる古文書は、この地域の持つもう一つの顔を教えてくれています。それは江戸の「場末」として「その日稼ぎ」の貧しい人々が数多く暮らす町としての顔なのです。これらの古文書の中には、鬼子母神の境内で絵馬を売りながら、病気の母と祖母の面倒をみるわずか一二歳の少年徳五郎が、生活が立ち行かなくなり、江戸幕府に「御救」（救済願い）を訴える話も出てきますが、そのような江戸の「影」とでも言うべき地域でもあったこの時代の豊島の姿に、ぜひ接してみて下さい。

（収蔵展示室に関係資料を展示しています）

1989年度　資料館事業予定

1．郷土資料館運営委員会
　委員会　　年間4回予定
2．展示概要
　(1)　常設展示
　　「園芸の里」・「アトリエ村」・「ヤミ市」
　　その他、展示替えの可能なスペースを利用してコーナー展示
　　現在は、学童疎開関係書簡類、手塚治虫関係資料を展示
　(2)　特別展示
　　戦中・戦後の区民生活展（仮称）　平成元年12月8日～平成2年1
　　平成元年12月8日～平成2年1月31日
3．各種講座の開催
　(1)　地域史講座（獅子舞関係）
　(2)　〃　（失われた水辺）　連続講座（フィールドワーク含）
　(3)　歴史講座　（女性史関係）　連続講座
　(4)　〃　（鎌倉街道を探る）　連続講座（フィールドワーク含）
4．所蔵資料の整理
　(1)　6月より燻蒸作業（前期）　1ヵ月　郷土資料館収蔵庫
　　8月より　〃　（後期）　1ヵ月　旧宣教師館収蔵庫
　(2)　蔵書整理
　(3)　文書整理　区史引き継ぎ資料及び三輪文書
5．埋蔵文化財調査の実施
　　駒込六丁目遺跡（日本郵船地区）の出土品整理及び報告書作成
　　駒込六丁目遺跡（丹羽家地区）調査
6．刊行物の発行
　　郷土資料だより　15号～18号
　　豊島区地域地図　第3集　近世編(1)　江戸切絵図
　　調査報告書　第4集　トキワ荘関係資料集
　　調査報告書　第5集　学童疎開関係史料集
　　収蔵資料目録　第4集　長崎地区資料、遠藤コレクション
　　紀要・年報「生活と文化」第4号
　　特別展図録　戦中・戦後の区民生活
7．歴史生活資料調査の実施
　　調査対象地域　旧西巣鴨地区
　　調査対象　20,790世帯（豊島区の統計より）
　　調査期間　予備調査　4月18日～23日
　　チラシ配布　5月9・10日
　　本調査　5月16日～6月1日
　　調査整理　6月2日～7月12日

豊島区の遺跡　第五回

染井遺跡の発掘調査①

近年、新聞やテレビでは、華々しい発掘調査の成果をニュースとして報道することが多くなってきました。「吉野ヶ里遺跡」や「藤ノ木古墳」そして、たくさんの木簡を出土した「長屋王居館」などは、まだ皆さんの記憶にも新しいものと思います。

ところで、そのようなマスコミによって報道されるチャンスに恵まれた「遺跡」以外のものには、歴史的な価値は無い……というような考え方を持っている人もいるようです。果してそうでしょうか？　私たちが歴史に関心を持つのは、ある種のロマンをそこに感じるからであるのかも知れませんが、同時に、自分自身の先祖の歴史や、自分の住む土地の歴史を知りたいという内在的な要求が、そこに反映されているからではないでしょうか。とするならば、わたくしたちの身近かに残されているどのようにささやかな「遺跡」であっても、その土地に生きた人々の生活の痕跡である以上、その地域の歴史を知る上では、何ものにも替えがたい大切な意味を持っているということになると思います。

さて、豊島区の歴史をひもとく時、必ず出会うものの一つに「駒込・巣鴨地区の園芸」があります。資料館でも、それを常設展示のテーマの一つに選んでいるほどです。

この駒込・染井地域は、江戸時代の終り頃に日本にやって来た英国人植物学者フォーチューンがその著書『江戸と北京』の中で「世界最大の園芸センター」であると評したように、江戸時代の極めて著名な園芸の里であり、一般的に桜の代名詞ともなっている「ソメイヨシノ」の「ソメイ」がこの地の「染井」にちなんでいることも良く知られています。そして、当時の江戸市民の憩いの場所としても良く知られていました。しかし、残念なことに実際に染井地区を歩いてみても、当時の面影は一部を除いて消え失せており、当時を偲ぶことはなかなか難しくなってきました。

ところが、それは「地上」での話であって、地面の下には、今でも当時の植木屋が生活し活躍した場所の痕跡が残されているのです。現在、この地域は再開発の波に飲み込まれようとしていますが、それに先立って、この植本屋たちの様子を明らかにしていく必要がでてきました。今回紹介しようと考えている発掘調査の成果も、そうした状況の中で実施されたものの一つです。

わたくしたちはこの地域を今まで「駒込六丁目遺跡」と呼んできました。六丁目を中心に遺跡が広がっていると考えてきたからです。しかし、予想以上に江戸時代植木屋の生活の痕跡が良く残されていることなどを含めて、むしろこの地域の歴史的な地名である「染井」をとって「染井遺跡」と名付ける方が正確であろう、と考えるようになっています。その「染井遺跡」の一角、西福寺の前に日本郵船の所有地がありますが、ここに新しい建物が立てられることになり、それに先立って昨年十二月から今年の三月にかけて発掘調査を実施しました。

その調査の結果、ここには江戸時代の早い段階から幕末そして明治時代にいたる植木屋の生活の痕跡の残されていることが明らかになりました。その中には、地下室や畑の畝（うね）の跡、植木を植えた痕跡、柵（さく）ないしは塀（へい）と思われる柱列、たくさんの遺物が出土したゴミ穴などが含まれています。それとともに、その江戸時代を数千年もさかのぼる時代である縄文時代中期の住居跡や、恐らく縄文時代早期のものであろうと思われる動物を捉える落とし穴なども発見されたのです。また、この地域の歴史を考える上で見落とすことのできない重要な発見もありました。

次回から、それらの内容について、いくつかの項目にわけて紹介していきたいと考えています。

かたりべ
・
No.15
・
1989年6月15日
発行
・
豊島区立郷土資料館
・
豊島区西池袋2-37-4
・
電話03-980-2351